

# 北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第 898 号 平成 27 年 3 月 17 日

## 学校にエアコンは不要？

2月15日、埼玉県所沢市において大変珍しい住民投票が実施されました。

それは、航空自衛隊入間基地に近い防音校舎の小中学校にエアコンを設置すべきかどうかを問うもので、住民に身近なテーマであるはずの住民投票でしたが、結果は、31.54%という低い投票率に終わってしまいました。

投票の結果は、賛成票が64.86%、反対が34.24%と賛成が反対を圧倒しましたが、住民投票条例では「多数票が投票資格者の3分の1以上の場合、市長や市議会は結果の重みを斟酌しなければならない」と規定されていますので、投票結果がそのまま行政に反映されるかどうかは微妙なところです。

ところで、所沢市ではどうしてこのような住民投票が実施されるに至ったのか、その経過を見て置きたいと思います。

所沢市には近くに航空自衛隊の入間基地があり、自衛隊機の騒音対策として、47校ある小中学校の内29校について特殊サッシ等の防音対策が施されています。

市では、2006年（平成18年）、この防音対策が講じられている29校についてエアコンの設置方針を決定し、1校への設置を2億1700万円で完了後、新たな2校への設置準備を進めていましたが、2011年（平成23年）3月の東日本大震災及び福島第一原子力発電所の事故後に市長となった藤本正人市長が「快適さを優先した生活を見直すべきだ」として方針を転換し、学校へのエアコン設置を中止してしまいます。そして、この市長の方針転換に反発した保護者らが署名を集め、住民投票が行われる事となったものです。

エアコン設置の必要性に関しては、市長側と設置を要望する住民側とで真っ向から対立しています。

例えば、騒音に関しては、市長側は、市独自の調査では70dB以上の航空機騒音は1日当たり累積21秒で窓を開けても授業に支障はないとしているのに対して、住民側は、防衛省が定める基準からしても防音対策は必要なレベルとしています。

また、暑さに関しても、市長側は、室温が30度になるのは年間10日程で、最も暑いのは夏休みの時期だからエアコンは不要としているのに対して、住民側は、室温が40度を超える時もあり、子ども達は窓を閉め切った中で汗をかきながら授業を受けていると主張しています。

更に、財政に関しては、住民側が、防音校舎28校に同時に設置するのではなく、段階的に進めれば良いと主張しているのに対して、市長側は、エアコンを優先すれ

ば他の住民サービスに影響が出かねないとしています。

学校にエアコンを設置する事は是か非かというのは、結構難しい問題で、少なくとも、「自分が学校に通っていた頃はエアコンなんてなかったが支障はなかった。だから、学校にエアコンは贅沢だ」と、昔と比較して議論するのは適当とは思えません。

文部科学省によると、全国の公立小中学校のエアコン設置率は昨年4月時点で32.8%、埼玉県では48.9%、最も高い東京都では99.9%だったそうです（2月16日付朝日新聞から）。

また、全国の2人以上の世帯におけるルームエアコンの普及率を見ると、地域性を反映して北海道は15.8%と流石に低いのですが、全国的には88.1%、埼玉県では96.2%という高普及率となっています（平成26年8月総務省統計局発表資料から）。

地域性にもよりますが、快適な生活を送る上でエアコンは今や必需品とって良いと思います。一方、エアコンの普及が外気温を高める要因の一つになっているという皮肉な側面もありますので、藤本市長がいわれるように、電力等のエネルギーを大量に消費しながら「快適さを最優先する生活を見直すべきだ」というのは、決して間違っていないと思います。しかし、私達の身の周りを見れば、より便利で快適な生活が出来るように様々な分野で新たな技術が開発され、環境も整備されて来た訳で、快適な生活を見直すという事になれば、それは単にエアコンだけの問題ではあり得ません。本来は、社会のシステムまで含め多岐にわたって抜本的に検討しなければならないはずであり、そうした見直しの全体像の中で、学校におけるエアコン設置は如何にあるべきか議論すべきだろうと思います。

家庭でのエアコンは必要だが、学校には設置する必要はないというのでは、いささか理解に苦しみます。

勿論、快適さの追求も経済原則と切り離す訳にはいきません。学校は夏休みという長期休業期間がありますから、一番エアコンを必要とする時期には子ども達が学校にいない事を考えると、高いお金をかけて学校にエアコンを設置する必要はないという考え方も分からなくはありません。

一方、今回問題の対象となっているのは、近くに航空自衛隊の入間基地がるために騒音対策を講じている学校です。航空機の騒音を防ぐために防音措置を講じているのですから、暑かったら窓を開ければ良いという事にはなりません。窓を開けて済むのなら、防音工事自体が無意味だったという事になります。

真夏に、防音のためとはいえ、窓を閉め切った部屋でエアコンなしでいるというのは、学習の環境としてはかなり厳しいのではないかと、私には感じられます。

学校へのエアコン設置に反対した住民の中には、「多くの市民にはメリットが感じられない」とか「エアコンを設置すれば、市のほかの事業を削る等影響が出る」と

主張する人がいたようですが（2月16日付朝日新聞から）、「子ども達のために望ましい環境はどうあるべきか」という視点が置き忘れてはいないか、気になるところです。

また、エアコン設置反対に〇印を付けたのは、主に基地から遠い東部の住民だったそうで（2月16日付朝日新聞から）、そうした住民からすると、この問題は他人事だったのかも知れません。直接自分の身に関わらない問題であっても我が身に置き換えてしっかりと考える、というのは決して簡単な事ではないという事です。

住民投票は、住民の意向を直接行政に反映させるという意味で極めて重要なものであり、テーマの軽重はともかく、所沢市の市民にはもっと多くの方々に住民投票に参加していただきたかったと思っており、その点では残念でなりません。

また、皮肉ないい方をすれば、住民投票も結構ですが、いっその事、子ども達から直接意見を聞いてみたらどうだったのだろうかと思ったりします。

いずれにせよ、藤本市長は設置反対という自身の考え方は正しいと思っているとしながらも、「貴重な投票の機会の結果はきちんと受け止めなければならない（2月17日付北海道新聞から）」とも語っておりますので、如何なる判断を示されるのか、興味を持って見守っているところです。（塾頭：吉田 洋一）